

[A年]復活日(2025年4月20日)**【旧約聖書日課】創世記 1章1～5節、26～31節**

¹初めに、神は天地を創造された。²地は混沌であって、闇が深淵の面にあり、神の霊が水の面を動いていた。³神は言われた。

「光あれ。」こうして、光があった。

⁴神は光を見て、良しとされた。神は光と闇を分け、⁵光を昼と呼び、闇を夜と呼ばれた。夕べがあり、朝があった。第一の日である。

²⁶神は言われた。

「我々にかたどり、我々に似せて、人を造ろう。そして海の魚、空の鳥、家畜、地の獣、地を這うものすべてを支配させよう。」

²⁷神は御自分にかたどって人を創造された。

神にかたどって創造された。

男と女に創造された。

²⁸神は彼らを祝福して言われた。

「産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ。海の魚、空の鳥、地の上を這う生き物をすべて支配せよ。」

²⁹神は言われた。

「見よ、全地に生える、種を持つ草と種を持つ実をつける木を、すべてあなたたちに与えよう。それがあなたたちの食べ物となる。³⁰地の獣、空の鳥、地を這うものなど、すべて命あるものにはあらゆる青草を食べさせよう。」そのようになった。

³¹神はお造りになったすべてのものを御覧になった。見よ、それは極めて良かった。夕べがあり、朝があった。第六の日である。

【使徒書日課】ローマの信徒への手紙 6章3～11節

³それともあなたがたは知らないのですか。キリスト・イエスに結ばれるために洗礼を受けたわたしたちが皆、またその死にあずかるために洗礼を受けたことを。⁴わたしたちは洗礼によってキリストと共に葬られ、その死にあずかるものとなりました。それは、キリストが御父の栄光によって死者の中から復活させられたように、わたしたちも新しい命に生きるためなのです。⁵もし、わたしたちがキリストと一体になってその死の姿にあやか

るならば、その復活の姿にもあやかれるでしょう。

⁶わたしたちの古い自分がキリストと共に十字架につけられたのは、罪に支配された体が滅ぼされ、もはや罪の奴隷にならないためであると知っています。⁷死んだ者は、罪から解放されています。⁸わたしたちは、キリストと共に死んだのなら、キリストと共に生きることにもなると信じます。⁹そして、死者の中から復活させられたキリストはもはや死ぬことがない、と知っています。死は、もはやキリストを支配しません。¹⁰キリストが死なれたのは、ただ一度罪に対して死なれたのであり、生きておられるのは、神に対して生きておられるのです。¹¹このように、あなたがたも自分は罪に対して死んでいるが、キリスト・イエスに結ばれて、神に対して生きているのだと考えなさい。

【福音書日課】マタイによる福音書 28章1～10節

¹さて、安息日が終わって、週の初めの日の明け方に、マグダラのマリアともう一人のマリアが、墓を見に行った。²すると、大きな地震が起こった。主の天使が天から降って近寄り、石をわきへ転がし、その上に座ったのである。³その姿は稲妻のように輝き、衣は雪のように白かった。⁴番兵たちは、恐ろしさのあまり震え上がり、死人のようになった。⁵天使は婦人たちに言った。「恐れることはない。十字架につけられたイエスを捜しているのだろうが、⁶あの方は、ここにはおられない。かねて言われていたとおり、復活なさったのだ。さあ、遺体の置いてあった場所を見なさい。⁷それから、急いで行って弟子たちにこう告げなさい。『あの方は死者の中から復活された。そして、あなたがたより先にガリラヤに行かれる。そこでお目にかかる。』確かに、あなたがたに伝えました。」⁸婦人たちは、恐れながらも大いに喜び、急いで墓を立ち去り、弟子たちに知らせるために走って行った。⁹すると、イエスが行く手に立っていて、「おはよう」と言われたので、婦人たちは近寄り、イエスの足を抱き、その前にひれ伏した。¹⁰イエスは言われた。「恐れることはない。行って、わたしの兄弟たちにガリラヤへ行くように言いなさい。そこでわたしに会うことになる。」

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

創世記1章1～5節、26～31節

1初めに神は天地を創造された。2地は混沌として、闇が深淵の面にあり、神の霊が水の面を動いていた。3神は言われた。「光あれ。」すると、光があった。4神は光を見てよしとされた。神は光と闇を分け、5光を昼と呼び、闇を夜と呼ばれた。夕べがあり、朝があった。第一の日である。

26神は言われた。「我々のかたちに、我々の姿に人を造ろう。そして、海の魚、空の鳥、家畜、地のあらゆるもの、地を這うあらゆるものを治めさせよう。」

27神は人を自分のかたちに創造された。

神のかたちにこれを創造し

男と女に創造された。

28神は彼らを祝福して言われた。「産めよ、増えよ、地に満ちて、これを従わせよ。海の魚、空の鳥、地を這うあらゆる生き物を治めさせよ。」

29神は言われた。「私は全地の面にある、種をつけるあらゆる草と、種をつけて実になるあらゆる木を、あなたがたに与えた。それはあなたがたの食物となる。30また、地のあらゆる獣、空のあらゆる鳥、地を這う命あるあらゆるものに、すべての青草を食物として与えた。」そのようになった。

31神は、造ったすべてのものを御覧になった。それは極めて良かった。夕べがあり、朝があった。第六の日である。

ローマの信徒への手紙6章3～11節

3それともあなたがたは知らないのですか。キリスト・イエスにあずかる洗礼〔バプテスマ〕を受けた私たちは皆、キリストの死にあずかる洗礼を受けたのです。4私たちは、洗礼によってキリストと共に葬られ、その死にあずかる者となりました。それは、キリストが父の栄光によって死者の中から復活させられたように、私たちも新しい命に生きるため〔直訳→歩むため〕です。5私たちがキリストの死と同じ状態になったとすれば、復活についても同じ状態になるでしょう。6私たちの内の古

い人がキリストと共に十字架につけられたのは、罪の体が無力にされて、私たちがもはや罪の奴隷にならないためであるということ、私たちは知っています。7死んだ者は罪から解放されているからです。8私たちは、キリストと共に死んだのなら、キリストと共に生きることにもなると信じます。9そして、死者の中から復活させられたキリストはもはや死ぬことがない、と知っています。死は、もはやキリストを支配しません。10キリストが死なれたのは、ただ一度罪に対して死なれたのであり、生きておられるのは、神に対して生きておられるのです。11このように、あなたがたも自分は罪に対して死んだ者であり、神に対してキリスト・イエスにあって生きている者だと考えなさい。

マタイによる福音書28章1～10節

1さて、安息日が終わって、週の初めの日の明け方に、マグダラのマリアともう一人のマリアが、墓を見に行った。2すると、大きな地震が起こった。主の天使が天から降って近寄り、石を転がして、その上に座ったからである。3その姿は稲妻のように輝き、衣は雪のように白かった。4見張りの者たちは、恐ろしさのあまり震え上がり、死人のようになった。5天使は女たちに言った。「恐れることはない。十字架につけられたイエスを捜しているのだろうが、6あの方は、ここにはおられない。かねて言われていたとおり、復活なさったのだ。さあ、遺体の置いてあった場所を見なさい。7それから、急いで行って弟子たちにこう告げなさい。『あの方は死者の中から復活された。そして、あなたがたより先にガリラヤに行かれる。そこでお目にかかれる。』あなたがたにこれを伝えます。」8女たちは、恐れながらも大喜びで、急いで墓を立ち去り、弟子たちに知らせるために走って行った。9すると、イエスが行く手に立っていて、「おはよう」と言われたので、女たちは近寄り、イエスの足を抱き、その前にひれ伏した。10イエスは言われた。「恐れることはない。行って、きょうだいたちにガリラヤへ行くように告げなさい。そこで私に会えるだろう。」

黙想のためのノート**次主日の教会暦と聖書日課**

・4月20日「復活日」の日課主題は「キリストの復活」。伝統的に前夜から始められる復活祭に対応して、《前夜または早朝》と《日中》の二組、定められている。また、《前夜または早朝》として定められた日課は、「復活徹夜祭」の伝統を踏まえて、元来は旧約日課に三箇所(A年は、創1:1~5,26~31、出14:15~15:1、エゼ36:16~28)を定めているが、「日毎の糧」の日課表には一箇所だけ提示されている。「復活徹夜祭」は、「復活日」の前夜(イブ)から日の出にかけて断続的に行われてきた典礼で、東方正教会が大部分を残して続けているほか、西方教会でも簡素化して続けている教会が少なくない。一連の「復活徹夜祭」の中で「洗礼式」を執り行う伝統がある。他方で、日の出に合わせて「復活祭」を始める習慣も広く見られる。

・旧約日課は、「創世記」から、天地創造譚の最初と最後の箇所。使徒書日課は、「ローマの信徒への手紙」から、「洗礼」によるキリストとの結びつきに基づく生き方を提示する箇所。福音書日課は、「マタイによる福音書」から、復活顕現伝承譚の箇所。

旧約日課(創世記1章より)

・「創世記」は、『聖書』全体の第一巻であり、ユダヤ正典(ヘブライ語聖書)では「律法(トーラー)」の第一巻に位置づけられる世界と民族の創生伝承物語集。大きく分けて「原初の物語」と呼ばれる1~11章と「族長らの物語」と呼ばれる12~50章に区分されるが、両者は連続した物語を構成している。これらの物語、特に「原初の物語」の背景には、シュメール文明以来のメソポタミア・バビロンで継承されてきた世界創生伝承があるとされ、南王国末期以降の「バビロン捕囚」を通じて確立した伝承物語と考えられている。

・1節「初めに、神は天地を創造された(ベレーシート・バーラー・エロヒム・エト・ハシャマイム・ベエト・ハアレツ)」は、「神が天と地を創造された初め」とも訳し得る。『聖書』に基づくユダヤ・キリスト教の「創造論」の通説では、「神は無から世界を創造された」と説明され、『聖書』冒頭の「天地創造譚」もそのような解釈で訳されてきた。それによれば、天地創造は、「無の状態」からまず「混沌の地、闇の深淵(海)、水面の神の霊」(2節)が創造され、次に「光」(3節)が創造された、ということになる。しかし、1節を上述のように訳して素直に解すれば、まず前提として「混沌の地、闇の深淵、水面の神の霊」という状態があり、ここに「光」をはじめとする「天と地」の秩序をもたらしたのが「創造」であった、とも読める。

・26~27節の「人の創造」は、「我々」と自称する「神」が自身に「かたどって人を創造」されたと物語り、「神の似姿としての人間」観の元になっている。このような人間観はシュメール・バビロンの神話に見られ、メソポタミア文明に共通の世界観に基づいている。

使徒書日課(ローマ6章より)

・「ローマの信徒への手紙」は、「パウロ書簡集」の第一に配置されてきた書簡文書。パウロが未訪のローマ教会共同体を訪ねる計画をあらかじめ伝え、また、その後のエスパニア伝道への協力を要請するために著した書簡。パウロは、シリア・アンティオキア教会が派遣したバルナバ宣教団の一員として宣教活動を始めたが、「ガラテヤの信徒への手紙」で示唆されるような意見の相違からバルナバの元を離れ、独自の宣教団を組織してマケドニア伝道に赴くも、大きな成果を得られずにアテネを経てコリントに至った。しかし、コリントで出会ったローマ教会共同体出身のユダヤ人夫妻アキラとプリスキラと共に、同地での教会創設に携わることを通じて、「ガラテヤの信徒への手紙」で主張した過激な意見を封印し、調停的で包摂的な福音理解を構築するようになり、ペトロ(ケファ)を軸とする使徒らの主流教会ネットワークの中に位置づけられるようになった。このような経緯を踏まえて、パウロは、はじめてローマ教会を訪問するにあたり、自身の調停的で包摂的な福音理解を説明し、かつてのように過激な主張をしていないことを示すために、本書簡で長文の福音解説を述べていると考えられる。

・日課箇所では、パウロの調停的で包摂的な福音理解を教会論の中で位置づけるにあたって起点となる「洗礼」理解が示されている。パウロは、特別な説明抜きに「洗礼」を「キリスト・イエスと結ばれるため」のものとするが、この理解は「ガラテヤの信徒への手紙」でも同様に示されており(ガラ3:27)、パウロ独自の「洗礼」論ではなく、パウロ自身が(ダマスコでアナニアから)受けた「洗礼」(使徒9章)も含めて前提とされている初期教会に広く共有されていた「洗礼」理解と考えられる。本書簡でも「ガラテヤ書」でも、この「洗礼」論に基づいて、洗礼を受けた者が「神の子」とされるという理解が示されるが、これも初期教会で広く共通理解であったと推認される。本書簡での展開でパウロが独自に示していると考えられるのは、この「キリストと結ばれるための洗礼」を受けた者が、「キリストの死」にあずかり、さらに「キリストの復活による新しい命」にもあずかるという理解である。

・3節「キリスト・イエスと結ばれるために洗礼を受け」やガラ3:27「洗礼を受けてキリストと結ばれ」は、直訳すれば「キリストへと(イエス・クリストン)洗礼された」という表現が用いられている。この表現は、元来の「洗礼する(バプティゾー)」の語の意味する「水に浸らせる」という語義から派生して、何者か(神や教祖など)の信者集団に所属させる入会儀礼を意味する用語として用いられるようになった表現と考えられている。他方で、11節「キリスト・イエスに結ばれて」は、直訳すれば「キリスト・イエスの内で(エン・クリストー・イエスー)」で、「キリストにあって」などとも訳され、パウロが多用する表現。しかし、この箇所では、これらより「キリストと共に(シュン)」という表現の多用が目立つ。

福音書日課(マタイ 28 章より)

・日課箇所は、主イエスの復活顕現伝承の中でも「空の墓の発見」として知られる場面で、四福音書がほぼ同様に伝えている。共通するのは、「週の初めの日の明け方」という設定や、最初に訪れたのが女性の弟子たちで、主イエスの遺体の不在と白い服を着た者の告げる言葉を聞いたという展開。この場面に「復活のイエス」が登場するのはマタイ福音書とヨハネ福音書で、マルコ福音書およびルカ福音書では、ここでの復活者の登場はない。また、ルカ福音書とヨハネ福音書は、「空の墓」の報告を女たちから聞いた弟子たち(ペトロ、ヨハネ?)が確認に訪れたとしているが、マタイ福音書はそのようなことを描いていない。

・墓の入口の石が取り除けられていたことを四福音書は共通して描くが、マタイだけは、それが「大きな地震」によることであったと説明している。しかし、これを自然現象として説明しているわけではない。

・空の墓を発見した女性たちが、その場で復活者イエスと出会う場面を、マタイはヨハネ福音書と同様の展開で描いており、同じ伝承に基づいていると考えられる。ただし、ヨハネは、ただ一人の女性、マグダラのマリアの体験した出来事としてのみ描いており、他の女性の存在を無視しているようにみえる。復活者が女性たちに呼びかける言葉としてマタイが描いている「おはよう」は、ギリシア語「カイレテ」で、「喜ぶ」を意味する「カイロー」の二人称複数命令形。日本語のニュアンスでは「ごきげんよう」に近い挨拶表現。

来週の誕生日 (4月20日~26日)

主日礼拝の讃美歌から

・21-331「主はよみがえられた」は、テゼ共同体の讃美で、フランスの作曲家ベルティエが作曲。テゼ共同体は、改革派牧師の子としてスイスに生まれ自ら牧師となったロジェ・シュッツ(ブラザー・ロジェ)が、1940年にフランス・テゼで超教派の「和解の共同体」を始め、ユダヤ人難民や孤児を匿ったことから始まった祈りの共同体(観想修道会に近い)。ベルティエは、パリ・聖イグナチオ教会オルガニストとしても活動する傍ら、1975年以降、テゼ共同体のために多くの讃美を作曲した。

・21-322「天の座にいます」は、M・ルターと同世代のボヘミア兄弟団メンバーM・ヴァイセの作詞で、原詞は20節あるが、『讃美歌 21』では現代ドイツ語讃美歌版に基づいて6節で編集。曲は、17世紀初頭、ルター派作曲家ヴルピウスによってこの歌詞のために作曲された。I 147「よろこびたえよ」は同じ讃美歌ではなく、別の英語讃美歌歌詞が付けられた『讃美歌』(1954年版)独自のもの。

・21-69 番「神はそのひとり子を」(☐ 20 番)は、現代オーストラリアのルター派讃美歌作家ロビン・マンの作詞作曲で、アジアキリスト教協議会編纂の「*Sound the Bamboo: CCA Hymnal 1990*」所収。

・21-79 番「みまえにわれらつどい」(= II 179)は、アフリカ系米国人の霊歌の伝統の中から生まれた讃美讃美で、19世紀前半の米国聖公会で作られたと考えられているが、詳細は不明。

・21-325「キリスト・イエスは」(= I 148「すくいぬしは」)は、原詞が14世紀のラテン語聖歌で、1708年発行英語讃美歌集『ダビデの堅琴』で英訳詞がこの曲と組み合わせられてから、代表的な英語イースター讃美歌として歌われてきた。

21-331「主はよみがえられた」

Surrexit Dominus vere

Surrexit Dominus vere. / Alleluia, Alleluia,
Surrexit Christus hodie. / Alleluia, Alleluia.

21-322「天の座にいます」

Gelobt sei Gott im höchsten Thron

1. Gelobt sei Gott im höchsten Thron / samt Seinem eingebornen Sohn, / der für uns hat genug getan. / Halleluja, Halleluja, Halleluja.
2. Des Morgens früh am dritten Tag, / da noch der Stein am Grabe lag, / erstand er frei ohn alle Klag. / Halleluja, Halleluja.
3. Der Engel sprach: "Nun fürcht' euch nicht; / denn ich weiß wohl, was euch gebricht. / Ihr sucht Jesus, den find't ihr nicht." / Halleluja, Halleluja, Halleluja.
4. "Er ist erstanden von dem Tod, / hat überwunden alle Not; / kommt, seht, wo Er gelegen hat." / Halleluja, Halleluja, Halleluja.
5. Nun bitten wir Dich, Jesu Christ, / weil Du vom Tod erstanden bist, / verleihe, was uns selig ist. / Halleluja, Halleluja, Halleluja.
6. O mache unser Herz bereit, / damit von Sünden wir befreit / Dir mögen singen allezeit: / Halleluja, Halleluja, Halleluja.

21-69「神はそのひとり子を」

Father welcome all his children

Refrain: Father welcomes all his children / to his family through his Son. / Father giving his salvation, / life forever has been won.

1. Little children, come to me, / for my kingdom is of these; / life and love I have to give, / mercy for your sin.
2. In the water, in the word, / in his promise be assured: / those who are baptised and believe / shall be born again.
3. Let us daily die to sin, / let us daily rise with him — / walk in the love of Christ our Lord, / live in the peace of God.

21-79「みまえにわれらつどい」

Let us break bread together

1. Let us break bread together on our knees;
Let us break bread together on our knees.

Refrain: When I fall on my knees, / With my face to the rising sun, / O Lord, have mercy on me.

2. Let us drink wine together on our knees;
Let us drink wine together on our knees. [Refrain]
3. Let us praise God together on our knees;
Let us praise God together on our knees. [Refrain]

21-325「キリスト・イエスは」

Surrexit Christus hodie

(English Translation)

Christ is risen today / For the comfort of all people. / He endured death yesterday / He suffered instead of Man. / Women to the tomb / Bring spices as gifts, / Search for the Lord Jesus / Who is Savior of Men. / See a white angel Announces joy: / Women oh trembling, / Into Galilee proceed, / To disciples they declare, / That the king of glory is risen. / Peter next and the others / Appears to the apostles. / In this paschal joy / Bless the Lord. / Glory to you, Lord, / Who raised out of death. / Praise holy Trinity / We give thanks to God.